
サッカーのある生活とその維持
—— カンボジア王国における
日本人サッカー移民を事例に ——

*Life with Football and its Maintenance :
A Case Study of Japanese Football Immigrants
in the Kingdom of Cambodia*

後藤 貴浩
Takahiro Goto

Abstract:

The purpose of this research is to clarify how Japanese football immigrants in Cambodia are making the living football life. As a result of an interview survey on the first Japanese professional football players in Cambodia, the following findings were clarified. Daily living relationships such as encounters and events with various people are important for maintaining a life with football. Daily living relationship was defined as "Living Capital". "Living Capital" accumulated through daily life can lead to stable in both life and survival. In all social situations "Living Capital" does not develop a life, but there is the possibility of becoming "Capital" in the range of individual living.

キーワード：日本人サッカー移民、生活の安定、生活関係資本

1. 問題関心

現在、東南アジアでプレーする日本人サッカー選手は100名以上^{*1}になるといわれている。ヨーロッパを中心とする「海外組」とは異なる「もう一つの海外組」が存在する。筆者は、2012年からシンガポールやタイでプロサッカー選手となった若者たちを対象に、彼らはどのようにしてそこにたどり着き、現地ですべてどのように暮らし、そしてどこに行きつくのかという問題関心のもと、幼少期から慣れ親しんだ「サッカーのある生活」を維持する戦略について検討してきた^{*2}。現在のところ、東南アジアは、彼らが自らの置かれた生活条件^{*3}の中で、「労働としてのサッカー」と「生き方としてのサッカー」を両立させ、生活を安定させることのできる場となっていることが明らかになった（後藤、2013・2018）。

さて、スポーツ選手のグローバルな移動に関しては多くの研究蓄積がある。もっとも代表的なのは、Maguire Joseph（1996・1999）の研究であろう。彼は、グローバルに移動するスポーツ選手を「スポーツ労働移民」と呼び、移動先にスポーツを伝道する「開拓者（Pioneers）」、金銭目的の「傭兵（Mercenaries）」、移籍先に移住する「定着者（Settlers）」、スポーツの技能を携えて国境を渡る「遊牧的コスモポリタン（Nomadic Cosmopolitans）」、母国への帰属意識を確認する「帰還者（Returnees）」の5つに分類した。この類型を参考に、日本でも、千葉直樹・海老原修（1999）、石原豊一（2010・2013）、高橋義雄（2004、2012、2013）などが、海外にプレーの場を求める日本人スポーツ選手に関する研究に取り組んでいる^{*4}。本稿でも、Maguireに倣い、東南アジアでサッカーに携わる日本人を「日本人サッカー移民」として捉える。ただし、これまでの現地調査を通して分かったこととして、東南アジアにはサッカーを生業とする「プロサッカー選手」だけでなく、サッカー指導者（ボランティア含む）やサッカービジネスに携わる者なども存在することから、それらを含めて「日本人サッカー移民」と捉えておくこととする。

これらのスポーツ労働移民研究には、機能論的立場とマルク主義的立場の2つの大きな流れが認められる。前者においては、海外移籍の要因分析や移籍が与える社会的・文化的影響について検討され、後者では、労働力の搾取論やグローバリズム論として議論が展開されていく。しかし、いずれの研究においても、スポーツあるいはスポーツに関わる事象のみを取り上げ、それとの関係から「海外移籍」を説明しようとする傾向が強い。筆者が、現地調査で出会った「日本人サッカー移民」は、決してサッカーのみで生活しているわけではなかった（もちろん生活の重要な部分ではあるが）。生活条件の変化に合わせて、時にはサッカーから離れたり、制限をかけたりしながらサッカーを続けているように見受けられるのであった。そこで、本稿ではこれまでのスポーツ労働移民研究で取り組まれてきたようにスポーツの側から海外移籍（移住）を説明するのではなく、彼らの生活全体を分析対象とする。それにより、彼らがどのようにしてサッカーのある生活を成り立たせようとしているのかという問いに迫ることが可能になる。

一方、本稿では、サッカー競技を引退したあとの生活も議論の対象となる。したがって、近年のセカンドキャリア研究の動向についても確認する必要がある。スポーツ選手のセカンドキャリアについては、これまで「トップレベル競技者のセカンドキャリア支援に関する調査研究事業報告書」（文部科学省、2008）や「スポーツ立国戦略」（文部科学省、2010）に見られるように、キャリア支援に関する提言や実践的な対応に関するものが多かった。それは、「スポーツの能力には様々な汎用性、応用性があることをスポーツ界が証明し、その能力獲得過程から個人の能力を正しく評価し活用す

るまでのキャリア全体について、スポーツだけでなく社会のモデルとできるような取り組みが必要である」(菊幸一, 2012)という価値意識を前提としている。2020年東京オリンピック・パラリンピックを契機に多くの若者がトップアスリートを目指す可能性があるなかで重要な取組みであるといえるであろう。また、このようなセカンドキャリア形成のための制度的・実践的議論だけではなく、スポーツ選手の学歴および競技成績と引退後の職業との関連に関する研究(海老原修, 1993)やキャリアトランジションに関わる我が国のスポーツ界の構造的問題に関する研究(松尾哲矢, 2012)などもある。

これらの研究では、スポーツキャリアの価値・機能を前提とするため、必然的にトップレベルの選手が対象となる。しかしながら、現実には、決してトップレベルにはなることができなかった多くのスポーツ選手が存在する。これまでのセカンドキャリア研究では、そのような「その他大勢」のスポーツ選手は等閑視されてきたといえる。本稿では、カンボジア王国(以下、カンボジアとする)における「日本人サッカー移民」を対象とする。彼らは日本のJリーグチームからは決して声のかからないレベルの選手である。それどころか、高校や大学ではレギュラーにもなれなかった者や、途中で挫折し再度サッカーに関わるようになった者もいる。そのような彼らが、どのようにして「サッカーのある生活」を維持させようとしているのかを知ることは、今後のセカンドキャリア研究に新たな視座をもたらすものと考えられる。

本稿の目的は、カンボジアにおける日本人サッカー移民が「サッカーのある生活」をどのように成り立たせているのかを明らかにすることである。具体的には、カンボジアで初の日本人プロサッカー選手となったO選手と同国でサッカービジネス(GS社)を展開するS氏及び高校までサッカーを続け大学卒業後に一般企業を経てGS社に就職したT氏への聞き取り調査を行った。2017年2月6日～9日に、それぞれ90分程度の聞き取り調査を行うと同時に、S氏の仕事(孤児院でのサッカー指導など)に同行し参与観察を行った^{*5}。また、S氏への聞き取り調査は、カンボジアでの現地調査以前に彼が居住するシンガポールでも行っており(2016年10月3日～6日)、その際入手したデータも適宜使用することとした。

2. カンボジア社会とサッカー

1) カンボジア社会^{*6}

カンボジアの面積は、日本の約2分の1弱(181,035km²)で、ベトナム、タイ、ラオスに隣接している。人口は、1,506万人(2015年)でそのうち183万5千人が首都プノンペンに居住している。世代別人口(2008年)をみると、14歳以下33.7%、15歳以上64歳以下62.0%、65歳以上4.3%となっており、1970年代のポル・ポト政権下での飢餓や虐殺の影響が大きい。公用語はクメール語で、仏教を国教とする宗教国家である。近年の経済動向をみると、2004年から2007年までの4年間、10%を超える高い経済成長を記録した。世界同時不況の影響を受け、2009年の経済成長率は0.1%まで落ち込んだものの、その後は6～7%成長を続けている。今後も、縫製品等の輸出品、建設業、サービス業及び海外直接投資の順調な増加により安定した経済成長が見込まれている。特に、縫製・製靴業に従事する女性ワーカーは70万人以上いると言われ、プノンペン近郊では朝夕に荷台に大勢の女性ワーカーを乗せたトラックが列をなしている。ちなみに、2017年に、ワーカーの最低賃金が9.3%引き上げられ月額153USドル(以下、\$と表記する)となっている。

稲田十一（2013）によると、カンボジアの社会構造は3つの歴史的区分で大きく異なる。一つは、アンコールワットに象徴されるクメール王朝以来の伝統的社会の時代。次に、フランスによる植民地化及びそれに続く王国としての独立の時代。この期間、先の人口構造でも触れたように、1970年代の政治的混乱、とりわけボル・ポト政権下の既存社会の徹底的な破壊の影響は極めて大きい。そして、1992年以降の新しい国づくりと近年の国際化が進む時代に分けられる。民主的な制度を目指した新しい国づくりや近年の経済的發展が、多くの国際的援助によって支えられてきたことに留意しなければならない。主要援助国の支援額を見ると、中国318百万\$、日本153百万\$、米国86百万\$（2014年推計値）となっており、日本の影響力も少なくない。現在、在留邦人は2,800人（2016年）で、日本人商工会には238社が入会している。

国際的な援助は、教育の分野でも盛んに行われている。カンボジアの教育制度を研究するピン・チャンキア（2013）によると、1979年にボル・ポト政権が崩壊し、新政権は自由と平和の象徴として積極的に教育を推進した。しかし、1979年に再開された5,290校の小学校は、1983年には3,005校まで減少し、就学率は首都プノンペンでは90%程度であったものの、農村部では30～40%程度に過ぎなかった。そこで、1986年には4-3-3制でスタートした学校制度を5-3-3制に変更し、識字率の改善を中心とした教育改革に着手した。さらに、1991年にパリ和平協定が締結されると西側諸国からの援助が再開され、外国人の専門家が主導して教育政策を立案し、外国からの資金により学校建設などのインフラ整備が進められた。現在、小学校6年生までの残存率^{*7}は61.2%であるが、国全体の就学率は92.9%（2011年）まで向上している。S氏がサッカー指導を行っている孤児院も、日本の大手外食企業の一つである「ワタミグループ」が建設・運営しており、同グループはこれまでカンボジアで200校以上の学校・幼稚園を建設している。

内戦時の混乱のあと（特に1991年以降）、社会基盤や制度の整備がさまざまな国際援助のもとで急激に押し進められている状況にある。では、本稿の問題関心との関係から日本によるスポーツ援助について最後に確認しておこう。まず国家的な援助として、『Sport for Tomorrow』が挙げられる。これは、2013年9月の国際オリンピック委員会（IOC）総会で、安倍総理が2020年東京オリンピック・パラリンピック招致のためのプレゼンテーションで示した国際貢献策の一つである^{*8}。安倍総理はその中で、「2020年に東京を選ぶとは、オリンピック運動の、ひとつの新しい、力強い推進力を選ぶことを意味します。なぜならば、我々が実施しようとしている『Sport for Tomorrow』という新しいプランのもと、日本の若者は、もっとたくさん、世界へ出て行くからです。学校をつくる手助けをするでしょう。スポーツの道具を、提供するでしょう。体育のカリキュラムを、生み出すお手伝いをするでしょう。やがて、オリンピックの聖火が2020年に東京へやってくるころまでには、彼らはスポーツの悦びを、100を超す国々で、1,000万になんなんとする人々へ、直接届けているはずなのです」と述べている^{*9}。その一環として、カンボジアに対しては、JICAを通じたスポーツ指導者の派遣や障がい者スポーツの支援、大学と連携したスポーツボランティアの派遣・交流などが行われている。またJリーグチームによるサッカー指導も展開されており、後述するように、S氏が経営するGS社では現地でのアテンドを請け負っている。民間レベルでは、元女子マラソンのメダリストである有森裕子が代表理事を務める『特定非営利活動法人ハート・オブ・ゴールド』の取り組みがある。「アンコールワット国際ハーフマラソン&アンコールウォーク」の開催や「カンボジア王国小学校体育科教育指導書作成支援」などを行っている。小学校の体育授業

や運動会への支援の中には民間旅行会社が企画するものもある。国際的な援助のもと社会体制を整えつつあるカンボジアにおいて、日本からのスポーツ援助もその一つの柱となっていることを確認しておきたい。

2) カンボジアサッカーと日本

さまざまな社会基盤や制度が整えられつつあるカンボジアであるが、スポーツ環境に関しては、庶民の日常的なスポーツ環境からトップレベルのものまで十分に整備されたものとはいえない。しかし、筆者が訪れたナショナルスタジアムの周辺では、日中はサッカーのプロチームや障がい者アスリートたちが練習に励んでおり、夕刻には大勢の人たちがジョギングやウォーキングに汗を流していた。また、孤児院へ向かう道中（プノンペンから4時間程度）でも、多くの若者たちがフットサル場でプレーを楽しんでいる姿を見かけることができた。

カンボジアのプロサッカーリーグでは、3月から10月の期間、ホーム&アウェー方式で12チーム（2017年）が競い合う。入場料は100円前後で、1,000人程度の観客数（時には100人程度のこともある）となっている。スポンサーからの寄付なども少ないため経営状況は非常に厳しく、多くのチームはオーナー企業が出資する形で運営されている^{*10}。また、ほとんどのチームが育成部門（アカデミー）を持っておらず、国内には継続的に活動するサッカー組織や大会も存在しないため、組織的・専門的なトレーニングを経験したことがないままプロになる選手もいる。O選手によると「パスを出してどこに走って良いかも分からない」選手や非科学的なトレーニングを強制的に課す監督もいる。

プロ契約を結ぶ選手は、カンボジア人選手の場合、下位チームで月給150～250\$（2万円～3万円）、上位チームの中心選手で1,000～1,500\$（12万円～15万円）といわれる（有名選手はCMの出演料などの収入もある）。O選手によると、カンボジアのサラリーマンは平均月収は約200\$（公務員の初任給も200\$程度）であり、国内におけるサッカー選手の経済的な位置づけはそれほど低くない。また近年は、大企業がコマーシャルでサッカー選手を使うようになり社会的な注目も集めている。

外国人枠は5名で、試合には常時3名とアジア人選手1名が出場できる。外国人選手の月給はカンボジア選手の2倍ほどで、下位チームで300～500\$（4万円～6万円）、上位チームで、3,000～4,000\$（30万円～50万円）といわれている。カンボジアでプレーする多くの日本人選手は実績が乏しく、決して十分なサラリーを受け取っているわけではない。しかし、「日本食を食べたらアウトだけど、ローカル食を食べるのであれば十分やっつけていける」とO選手は話す。プノンペン市内には、東南アジアで多く見られるような屋台やフードコートがたくさんあり、1食2～3\$（300円前後）で済ませることができる。

2017年シーズンに在籍している日本人選手は11名（7チーム）となっている。以下に、それぞれの選手が所属したチームのカテゴリーを示す。高校については、全国大会常連校を「強豪高校」、地区大会・県大会上位校を「中堅高校」とし、大学は所属リーグ名を記した。

A（26歳）：強豪高校→東海学生1部→J2→JFL→カンボジア

B（25歳）：強豪高校→関東学生1部→J3→シンガポール1部→カンボジア

- C (25歳)：中堅高校 (U-17・19 日本代表) → 関西学生 1 部リーグ → シンガポール 1 部 → カンボジア
- D (39歳)：強豪高校 → J1 → スペイン 2 部 → J1 → 東南アジア複数国 1 部リーグ → カンボジア
- E (22歳)：強豪クラブユース → 東京都学生 1 部 → カンボジア
- F (23歳)：中堅高校 → 社会人地域リーグ → カンボジア
- G (27歳)：強豪高校 → (サラリーマン) → タイ 3 部 → カンボジア
- H (23歳)：強豪高校 → 関西学生 1 部 → カンボジア
- I (25歳)：中堅高校 → J1 → シンガポール 1 部 → JFL → カンボジア
- J (25歳)：強豪高校 → 関東学生 1 部 → カンボジア
- O (30歳)：中堅高校 → 専門学校 → 社会人地域リーグ → タイ 3 部 → カンボジア

上記選手の中には、カンボジアリーグに所属後に複数のチームを渡り歩いた選手もいる。そのうち4名は「カンボジアンタイガー FC」というチームに所属した経験がある。この「カンボジアンタイガー FC」*11 は、日本国内でコンサルティング業を営む会社が、赤字経営に陥ったクラブ（日本人が経営）を買収（改名）したチームである。これまで十数名の日本人が所属しており、2017年はD選手（監督兼務）とE選手の2名が所属している。また、カンボジアリーグはホーム&アウェー方式で戦うものの、12チーム中9チームが首都プノンペンのチームであるため、ほとんどの試合がプノンペンで開催される。そのため、地方のチームに所属する日本人選手であってもプノンペンに住んでおり、日本人選手同士でカフェや飲食店に集うことが多い。彼らはそこでサッカー（移籍に関する情報）に限らず日常生活に必要なさまざまな情報を交換している。その集まりの一つに「K会」がある。これは、2008年からJICAのスポーツ援助の一環として、Jリーグからカンボジアの審判員の育成のために派遣されたK氏を中心とする日本人サッカー関係者の集まりである。本稿で事例とするO選手、S氏、T氏もこの集まりに参加し選手たちとの交流を深めているということであった。

3. 日本人初カンボジアプロサッカー選手 —O選手—

カンボジアで日本人初のプロサッカー選手となり、同国リーグ7年目を迎えるO選手は、富山県出身の30歳である。また、プロサッカー選手であると同時にS氏らと立ち上げたGS社の社員という立場でもある。現在は、GS社の事務所兼社員寮に同じ社員のT氏と一緒に住み、サッカースクールのコーチやイベント運営にも携わっている。

富山県富山市のスポーツ少年団でサッカーを始めたO選手は、地元の中学校・高校へと進学し、部活動でサッカーを続けた。競技レベル的には「小学校の時のクラブは創部2年目の弱小クラブで、中学校は1年生が半分ぐらい出場し、練習メニューも生徒たちが決めるような部活」であった。しかし彼自身は、富山市の選抜チームに選出される実力があり、高校は県内ではトップレベルの高校（公立）へ進学した。小中学校と同地域にあるこの高校は、全国レベルの私立高校と毎年全国大会出場を競うほどのレベルにあり、地元のサッカー少年の憧れの高校だった。高校では、3年間レギュラーになることができず、常に2軍で練習していたが、「自分が出られないのは実力ではなく、たまたま出られないだけで、出場したらレギュラーと変わらないプレーができる」と思っていた。当

時から「自分は絶対プロサッカー選手になる」と決めており、卒業時には両親が大学進学を勧めたがプロになるには4年間は長すぎると考え、2年間でプロになれる可能性のあるサッカー専門学校（長野県）に進学した。その頃を振り返り、「なれないとは思わなかった。なるとしか思わなかった。どうやったらプロになれるかだけ考えていた」と語っている。

専門学校では、スポーツ選手養成コースに所属し、専門学校生で構成されたチームで北信越2部リーグを戦った。チームでは1年目からレギュラーで出場し、プロチームの2軍との練習試合などにも出場することができ、改めて自分がプロでもやれると実感した。2年目には、プロ選手が所属するチームを破り天皇杯にも出場し、より一層プロ選手になる気持ちが強まった。そして、「Jリーグに入っている俺と変わらない選手はどうやって入団できたのかが分からなかった」ため、チームの監督にプロチームのトライアウトの機会が得られるように依頼した。しかし、他のチームメイトにはその機会が与えられた一方で、彼は企業チームに行くように勧められ、「仕事しながらサッカーを続けるのはプロではない」と辞退した。このときから海外のプロチームへのトライアウトを考え始めた。

国内でプロチームへのトライアウトの機会を得られないまま専門学校を卒業したあと、三重県にある東海2部リーグのチームに所属することとなった（週3回練習と土日試合）。ゴルフ場のレストランやプラスチック工場でアルバイトをしながら、生活費と海外トライアウト挑戦の費用を稼いでいた。そして、「日本より弱い国だとプロになりやすいだろう」と考え、インターネットで東南アジアなどの海外リーグのトライアウトの情報を収集していた。その過程で、シンガポールにあるG社とコンタクトを取るようになり、半年後には三重県のチームを退団し、G社の斡旋でシンガポールリーグ（Sリーグ）のトライアウトを受けた。このG社は、S氏^{*12}が元シンガポールのプロサッカー選手（N氏^{*13}）とともに立ち上げたサッカービジネス会社で、サッカースクールのほかにシンガポールでプロサッカー選手（Sリーガー）を目指す日本人の現地アテンド業務も行っていった。後述するように、O選手はこの出会いをきっかけにN氏やG社が展開するサッカービジネスに興味を持つようになり、カンボジアでプロサッカー選手なった後に、S氏およびN氏とともにGS社を立ち上げることとなったのである。

シンガポールでは、G社のサッカースクール会員の家庭にホームステイしながら、複数のチームのトライアウトに挑戦したがいずれも契約には至らなかった。しかし、「シンガポールのサッカーはレベルが低く、自分は全然通用するし、他の助っ人外国人にも負けていない。単に日本での経験や実績がなかったため契約に至らなかった」と考え、いったん帰国し再度挑戦することとした。帰国後は、北信越リーグ2部のチームで1年間プレーし、アルバイトでトライアウト費用を蓄えた。最初にシンガポールに挑戦した際には全く反対しなかった両親は、2度目は猛烈に反対した。しかし彼は、「大学に行ったとしたらちょうど4年目なので最後の挑戦だし、絶対契約してくる」と両親を説得し再びシンガポールへと向かった。

結果的には2度目の挑戦も失敗に終わった。しかし、プレーに対する自信を失うことはなく全くやめる気持ちはなかった。いったん帰国すると両親が反対するため、N氏に相談し、シンガポールからそのままタイへ移動しトライアウトを受けることとした。タイでは、1部リーグから3部リーグまで10チームほどのトライアウトに挑戦した。最初のチームはN氏の斡旋であったが、以後は、タイで先にプロサッカー選手となった日本人選手やボランティアで選手を紹介する人物を介してト

ライアウトを受けるようになった。しかし、どのチームでも練習には参加させてもらえるが、入団テストとしては見てもらえず、「相手にされない」と感じていた。そのようなとき、たまたま3部チームの日本人監督と知り合い、そのチーム関係者の紹介で結成したばかりのチーム（3部）のトライアウトを受け、始めてプロ契約を結ぶことができた（2010年）。その時、「やはりプロになるにはコネクションが重要だと実感した」という。当時の契約は、月給12,000バーツ（約40,000円）と勝利給（3,000円）、それに住居と朝食が付くという内容だった。貯蓄できるほどの給料ではないが、遊びにも行かなかったので、「普通」に生活できたという。それよりも、ここで初めて「プロサッカー選手」になれたという実感が強く、「これから先は俺の実力次第だ」と決心したという。

しかし、この年のリーグ戦では、3部リーグで3位という成績を残し6割程度の試合に出場していたものの、契約延長のオファーがなかった。タイ国内で別チームを探すことも考えたが、「タイの3部リーグでは目にとめてくれない。日本（メディア）から注目されるプロサッカー選手になりたい」と考え、東南アジアの他の国のトップリーグで「日本人初」としてプロ選手になることを目指した。まずは、ミャンマーリーグでの契約を目指して3か月滞在したが契約には至らなかった。そのため、いったんタイに戻り、カンボジア国境の3部チームと契約することとした（月給55,000円、住居・夕食付）。ところが、シーズンが始まったものの、「自分はタイの3部レベルの選手ではない」という思いが強く、モチベーションが上がらず2か月で退団した。その時のチームメイトにカンボジア代表選手が所属しており、その選手にカンボジアリーグでのアテンドをボランティアで行っている日本人を紹介されすぐにコンタクトをとった。後期リーグの開始2週間前であったが、前年度優勝チームと契約することができ、「日本人初」のカンボジアプロサッカー選手となったのである。

2011年の後期リーグでは、リーグ戦で優勝しメディアからも取り上げられるようになった。日本からの取材もあり「これがプロ」ということを実感した。その後は、チームとの契約や起用法などでもめることもありながら、7年間で6チームを渡り歩きプロサッカー選手として過ごしている。決して給料は高くないが（50,000円前後）、とてもやりがいを感じている。そして、「監督やチームともめているにもかかわらず、このようにカンボジア内でチームを転々とできるのは、自分への評価が高いから」と認識しており、体の衰えは感じていないのでそのまま続けていくつもりだと語っていた。プロサッカー選手とGS社の仕事（サッカー指導）に携わる現在の生活にはとても満足しており、「憧れていたNさんに認められてとてもうれしい」という。カンボジアでプロサッカー選手になった時から、「Nさんのモノマネで、孤児院を訪問したり、サッカークリニックをやっていた。それにどうやったらスポンサーをつけるかなど、今はSさんがやってくれるようになった。ただのサッカー選手だったのがSさんのお蔭で仕事になるようになった」と語っている。

所属チームの活動やGS社の仕事もない休みの日は、日本人サッカー選手やGS社の日本人会員（主にフットサル教室）の友達と会っていることが多い。毎週木曜日と日曜日に開催している「大人のフットサル」の後は、毎回参加者と飲みに出かける。日本人が経営する飲食店に出かけることが多く、一人で行くこともある。GS社では小規模なイベントを毎週開催しており、そのスポンサー確保という意味合いもある。社長であるS氏が常駐していないため、O選手が商店や飲食店との関係を構築する役割を担っている。そしてO選手は、「将来的にも、カンボジアから離れるつもりはない」と断言する。現役引退後は、GS社の事業を通してサッカーを通じた日本とカンボジアの橋渡しになるような仕事をしたいと考えている。また、現在交際しているカンボジア人女性と結婚す

る予定もある。女性は、国内の大学を卒業後に、彼の知り合いの女性（日本人）が始めたマッサージ・ネイルサロンのお店（日本人向け）に就職し、O選手がトレーニングの合間にマッサージに通うようになって交際を始めた。その後、勤めていた店が倒産したため、現在は、O選手の知り合いが営む美容室の一角を借りてネイルサロンを開いている。

4. デュアル・キャリアとしてのGS社—その経営戦略—

カンボジアでのO選手のキャリアは、プロサッカー選手としてのものとGS社での活動の両面で形成されている。もちろん、これらは個別に展開されているのではなく、互いに関係づけられている。先に示したように、カンボジアでは外国人選手であってもそのサラリーは決して高いとは言えない。プロサッカー選手としてのO選手にとって、GS社での活動は経済的な下支えとなっていると同時に、引退後も現地に留まる（「定着者」(Settlers)になる）ための準備的活動でもある。一方、GS社にとってO選手は、事業を展開するうえでのシンボリックな存在となっており、またカンボジアのサッカー界との橋渡しの存在ともなっている。

では、GS社の設立経緯について確認してみよう。前述したように、O選手は最初の海外チームのトライアウトでシンガポールを訪れ、G社のN氏と知り合った。それ以来、プロサッカー選手としてだけでなく、引退後も現地にとどまりサッカーに関わり続けるN氏の姿に強い憧れを抱くようになった。O選手にとって、N氏はひとつの「ロールモデル」であったといえる。そして、初めてカンボジアでプロサッカー選手になった2011年、後期リーグの開催前にシンガポールで開かれたカップ戦に急ぎょ出場し、そこでN氏との再会を果たすことになった。その際N氏に、無事にプロ選手なれたこと、将来的にG社のような仕事をカンボジアでも行いたいと報告したのである。それを機に、G社の共同経営者であるS氏がカンボジアを訪れ、同年中にS氏、N氏、O選手が個人出資する形でGS社を設立した。現在、G社とは事業協力は行っているが、独立採算をとっており、「暖簾分け」的な会社という位置づけになっている。

GS社は、S氏（シンガポール居住）を社長とし、O選手・T氏¹⁴・M氏（クメール人女性・20歳代）の社員のほか、日本人のカンボジアプロサッカー選手2名のボランティアスタッフで運営している（繁忙期には現地採用のパートを入れる）。O選手は、カンボジアプロサッカー選手としてスクールコーチを担当し、日常の業務（イベント開催、スクール運営等）はT氏・M氏で行っている。

シンガポールのG社は日本人コミュニティを市場としたサッカースクール事業を基本としているが、カンボジアでは日本人コミュニティが小さく（カンボジア3,000人程度、シンガポール30,000人程度）、また会費も少額とならざるを得ないため、サッカースクール事業からの収入は全体の2～3割となっている。収入の5割を占めるのは、日系企業（トヨタ、ヤマハなど）をスポンサーとするイベントで、その他ローカルを対象とした小規模（地元の飲食業などからのスポンサー料を収入源とする）イベントが2～3割を占める。S氏は、G社と同様にサッカースクールを基本事業に据えながらも、現在のところ、日系企業のカンボジア進出のプロモーションイベント（「サッカーをツールとしたプロモーションイベント」）を重要視している。サッカースクールについては、今後はカンボジア人をターゲットにするような事業展開を目指しているということであった。そのため、クメール語・英語の両方が堪能で、16歳以下の元カンボジア女子サッカー代表だったM氏を現地採用している。近年、プノンペンを中心にフットサル場が多く造られるようになり、T氏に

よると底辺層でも少しずつ遊びにお金を使うようになってきているということであった。

GS社が展開する事業内容について、その中心的な業務にあたっているT氏の日常を追いながら見ていくこととする。GS社の事務所兼社員寮にO選手とともに暮らしているT氏の仕事は、事務作業とサッカー（フットサル）教室の指導に分けられる。毎週月曜日は休みで、火曜日と水曜日は9時から20時まで事務所でイベントの準備や報告書の作成などの事務作業を行う。木曜日も9時から12時および15時から18時まで事務作業をした後、19時から21時まで「大人の個サル」（大人を対象にした個人参加型のフットサル教室）の指導にあたる。教室は、エンジョイコースと中級コースの2つに別れており、計15名の登録会員うち毎回10名程度が参加する。会費は、1回5ドル（カンボジア人と日本人女性は半額）となっている。金曜日は9時から12時までの事務作業のあと半日の休みとなる。

土曜日は、朝7時に事務所を出て、バイクで50分ぐらいのところにある日本人補習校の年少クラスで8時から12時まで補助教員として日本語、運動遊びを指導する。これは、もともとO選手とS氏が2か月に1度ほどサッカー指導などのボランティア活動をやっていたもので、教員免許を持つT氏を採用したことを機に（2016年）、正式な補助教員の派遣業務を請け負うこととなった。午後からは、15時から18時まで子どものサッカースクールの指導にあたる。スクールは6歳以下、10歳以下、15歳以下の3コースが設定されており、計40名の会員が登録している。毎回の練習には、各コース10名程度（計30名弱）が参加する。8割が日本人（カンボジア人は2割）で、そのうち6割がインターナショナルスクール、4割が日本人学校に通っている。スクール料金は（創設以来5年間同額だったが、今年から改定）、入会金（年会費）100ドル（ユニフォーム代含む）、月会費60ドル（毎月8回の練習）となっている。都度払い会員（入会金100ドルは必要）は、1回10ドル（非会員は1回15ドル）で参加することができる。いずれもカンボジア人は日本人の半額となっている。また、10歳以下と15歳以下のコースでは、月に1・2回程度ローカルチームと練習試合を実施している。

日曜日、午前中は子どものサッカースクールの指導にあたり、午後はほとんど毎週フットサル大会などの小規模イベントを開催する。さらに、19時から20時30分まで「大人のガチ個サル」の指導にあたるが、O選手（別の日本人プロ選手であるG選手も参加することがある）も交えた本格的な練習（「プロトレ」）や試合をT氏自ら楽しんでいる。休みの日は、カフェや飲み屋でフットサル参加者や日本人プロサッカー選手と過ごすことが多い。カンボジアに来て1年になるが、時期によっては忙しすぎて寝る暇もないという。事務所と住居が一緒なので、一日中仕事している感じなので、できるだけ出勤時間を決めて仕事するようにしている。クメール語は少しずつ話せるようになったが、読み書きは難しく、同僚のM氏とは英語でやり取りをしている。

一方、「サッカーをツールとしたプロモーションイベント」に関しては、現在、2つの大きなイベントに取り組んでいる。一つは、2014年から毎年開催している15歳以下を対象とした国際サッカー大会「Yamaha Challenge International Friendly Match」である。これはカンボジアサッカー協会と締結した「育成年代における戦略的パートナーシップに関するMOU（覚書）」のもとで開催されている。冠スポンサーにヤマハ・モーター・カンボジアが入り、国際交流基金アジアセンターとGS社の共催という形で、日本のチーム（岐阜県選抜など）や14歳以下カンボジア代表、シンガポールのG社のスクールチームなどが参加して行われる。もう一つは、昨年（2016年）から開

催している「Toyota Junior Cambodia Cup」である。これは、まずプノンペン市内 24 校の小学校に予選大会の招待状を持参し、サッカークリニックを実施する（2016 年は約 5,000 人参加）。そして、4つのグループに分けて予選大会を開催し、各グループの上位 3 チーム計 12 チームが、「Toyota Mekong Club Championship」（メコン地域 5 か国のリーグ優勝チームが参加する国際大会）の開催に合わせて、ナショナルスタジアムで決勝トーナメントを戦うというものである。

このほかにも、2016 年はカンボジアの第二の都市バタンバンにある小学校でトヨタをスポンサーとしたサッカークリニックを全 84 校（延べ 10,000 人）で実施した。また、日本の外食事業者である「ワタミグループ」がカンボジアで展開する「スクールエイドジャパン」の一環で設立された孤児院でのサッカークリニックや交流事業にも取り組んでいる^{*15}。

5. サッカーのある生活を支える「生活関係資本」

本稿では、「日本人サッカー移民」である O 選手がどのようにしてカンボジアにたどり着き、どのように生活（仕事）をしているのかということを見てきた。社会基盤が整い切れていないカンボジアでは、サッカーに関する環境も未整備であり、プロサッカー選手のレベルも未成熟である。そのため選手のサラリーも低く、サッカー移民にとって魅力あるリーグとは言い難い。日本から来るサッカー移民のレベルも、Jリーグはもとより、タイあるいはシンガポールでさえ「通用しない」選手たちである。カンボジアでは、そのような若者たちが「プロ」サッカー選手として生活している。しかし、少なくとも O 選手の言葉からは、「プロ」サッカー選手としてのプライドとカンボジアでの生活に対する満足感を読み取ることができる。彼のライフストーリーをみると、一見、「夢をあきらめない」あるいは個人的な「趣味の追求」という側面からの分析がより妥当なようにも捉えられる。確かに、サッカーとの関わりにのみ焦点化するのであればそうであろう。あるいは、労働移民研究の立場から、安い賃金や暮らしぶりを搾取論として議論することも可能であろう。しかし、分析対象をもう少し押し広げ、彼らの生活の微細な部分にも着目するならばそれらとは異なる見解を得ることができる。

O 選手に限らず、GS 社の S 氏や T 氏も、サッカーのある生活への充足感を示している。決して経済的に恵まれているとは言えないが、彼らにとっては「安定」した生活がそこにはある。そのような生活を可能にしてきたものは何なのであろうか。O 選手のライフストーリーや GS 社の取り組み（T 氏の生活）から見えてくるのは、彼らの生活が、多くの人との出会いや出来事に支えられているということである。いうまでもなく、O 選手の幾度とない海外でのトライアウトを可能にしたのはさまざまな人とのつながりであった。中には、最初にカンボジアで現地アテンドをした日本人のように、直接サッカーとはかかわりのない人も含まれる。また、彼は、定期的に日本に帰りプロサッカー選手としての現状を、国内で一緒にプレーした選手や指導者だけでなく、アルバイト先の人たちにも報告するようにしている。そのような関係性を維持していくこと自体が彼の生活を支えているように思われる。一方で、現地における日常的生活関係も見逃せない。例えば、頻繁に（ほぼ毎日）同じ日本人プロサッカー選手とカフェに集い、サッカーだけでなくさまざまな情報交換を行っている。そして、GS 社ではサッカー指導だけでなく、スクールの会員とは毎週のように食事に出かけている。彼らとの日常生活的関係性も生活の「安定」を支える要因となっていると推察される。

そして、何よりも「ロールモデル」としての N 氏との関係は大きい。彼は、N 氏の「真似事」

として孤児院訪問や日本人補習校でのサッカー教室を行っていた。それを東南アジアにおける日本人プロサッカー選手の先駆的存在であるS氏が「仕事」にしてくれたのである。プロサッカー選手としてのO選手に経済的な「安定」をもたらしただけでなく、前述したようなスクール会員との関係性が紡ぎだされ日常生活にも「安定」をもたらしている。一方で、GS社の側から見ても、O選手やT氏の日常生活関係は重要な意味を持つ。GS社の事業は、「TOYOTA」や「YAMAHA」などのような一見グローバルな資本の流れに乗せられているように見えるが、それを現地で実践していくためには彼らが日常的に形成してきたローカルな人間関係が重要な役割を果たしているのである*16。

鳥越皓之（1996）は、いかに暮らすかということに関して、生存レベルと生活レベルに分けた議論を展開している。それは「食えること」と「誇り（夢）をもてること」と言い換えることができるであろう。筆者は、鳥越の議論を踏まえ、シンガポールにおける日本人プロサッカー選手たちが、自らの置かれた生活条件と生活意識に「折り合い」をつけていくことによって、彼らがサッカーのある生活の「安定」を図っていることを指摘した（後藤，2018）。本稿においても同様のことが結論付けられるが、今回の事例からはさらに、日常生活関係が生存レベルにおいてもまた生活レベルにおいても重要な意味を持つことが示唆されたといえる。さらに言うならば、O選手のまわりに形成された生活関係は、「食えること」と「誇り（夢）をもてること」の相互転換を可能にしていると捉えられるのである。このような日常生活関係を、本稿では、「生活関係資本」とひとまず定義しておきたい。日常生活を通して蓄積される「生活関係資本」は、生存レベルでも生活レベルでもその「安定」をもたらす可能性があるといえる。しかし、それが「資本」として機能する範囲には限界もある。例えば、O選手の場合、彼の生活に連関する人間関係や出来事の多くは、サッカーのある生活を通して経験される人間関係や出来事であり、そこには一定の共通した価値や生活規範が存在する。つまり、日常的な個別の生活経験を通して蓄積される「生活関係資本」は、普遍的に利用可能な「資本」として存在するのではなく、固有の「生活の範囲」において「資本」として機能する可能性があると理解される。このような考え方は、スポーツ経験の汎用性、応用性を前提するセカンドキャリア論にも重要な示唆をもたらすのではなからうか。

本稿では、カンボジアにおける日本人サッカー移民を事例に、サッカーのある生活を可能にする「生活関係資本」という概念を仮説的に生成することができた。今後は、他の事例や生活研究を通してより精緻化する必要がある。加えて、いわゆる「社会関係資本」との関係についても理論的検討が求められるであろう。今後の課題となるが、現時点で以下の点について言及しておきたい。ロバート・D・パットナム（2001）は、社会の効率性を高める概念として、信頼・ネットワーク・互酬性の規範を要件とする「社会関係資本」を提示した。「市民社会」を構想し、社会のつながりに重点を置く彼の研究においては「公共財」という側面が強調されるため、個人の生活に着目する「生活関係資本」とは大きく異なる。その点、人的ネットワークやコネクションとして捉えられるピエール・ブルデュー（1980）のものに近いと思われる。しかし、ブルデューの「社会関係資本」は、社会の階層化や搾取の構造を説明する概念として用いられるため固定的な印象が拭えない。本稿における「生活関係資本」はそのような差異化の資源ではなく、「安定」した生活を下支えするような生活関係のことを意味している。その力は決して大きなものではなく、生活の「発展」や「向上」が期待されるものでもない。あくまでも自分たちの生活のおよぶ範囲で機能する力である。しかし、

この些細な「生活関係資本」は、グローバルな流動社会の中を生き抜くための日常的な抵抗手段となる可能性があるということを描指しておきたい。特に、スポーツ界のように「競争」や「上昇」が求められる社会構造において、その構造の内部に留まりながら生活の安定化を図る有効な手段となり得ると考えられる。

-
- * 1 例えば、タイだけでも、3部リーグまで含めると50名近く（2014年シーズン）の日本人選手が在籍している。下位カテゴリー所属の選手の情報が限られており、練習生や短期間の所属などもあり正確な数は把握できない。
 - * 2 これらの調査研究は、科研費「スポーツ人材育成と社会移動の社会学」（代表者：甲斐健人、課題番号：24300217）によって行われた。
 - * 3 サッカーの技量、家族や友人関係、年齢など生活を営むうえでのさまざまな条件のこと。
 - * 4 小林勉（2014）が、「開発を後押しするためのスポーツ：Sport for development and Peace」の潮流が台頭してきたというように、今後はスポーツ選手のグローバルな社会移動を、「スポーツ援助」との関連から捉える必要が出てくると思われる。本稿で示される孤児院や小学校でのサッカー指導や用具の支給などの事例は、「スポーツ援助」としてどのように捉えられるか、今後の課題としたい。
 - * 5 本調査は、科研費「東南アジアにおけるサッカー移民とグローバリゼーション」（代表者：甲斐健人、課題番号：16H03228）によって行われた。
 - * 6 カンボジアに関する基礎情報は外務省HP（2017年5月11日取得、<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/cambodia/data.htm>）及び独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所HP（2017年5月11日取得、<http://www.ide.go.jp/Japanese/index.html>）から得た。
 - * 7 小学校の最終学年に達する児童の割合のこと。
 - * 8 外務省HPを参照のこと（2017年5月12日取得、http://www.mofa.go.jp/mofaj/p_pd/ep/page22_001221.html）
 - * 9 首相官邸HP参照のこと（2017年5月12日取得、http://www.kantei.go.jp/jp/96_abe/statement/2013/0907ioc_presentation.html）
 - * 10 2016年にカンボジアリーグに進出したアルビレックス新潟シンガポールは1年限りで撤退した。
 - * 11 「カンボジアンタイガーFC」のHPを参照のこと。（2017年5月16日取得、<http://www.cambodian-tiger.com/>）
 - * 12 S氏は父親が商社の駐在員だったため、3歳までフィリピン・マニラで過ごした。4歳で一時帰国し、小学校3年まで東京都の小学校に通いサッカーを始めた。小学校4年生から中学校2年生までシンガポールの日本人学校に通い、中学3年の時に高校受験のため帰国した。高校・大学と強豪校でサッカーを続けたがレギュラーになることはなかった。高校3年生の時にJリーグが開幕し、プロ選手になりたいと考えようになった。そして、幼少期を過ごしたシンガポールにプロリーグ（Sリーグ）があることを知り、証券会社の内定を断り、シンガポールのトライアウトを受けた。2部チームと契約することができたが、怪我のため半年での引退を余儀なくされた。その後、2年半、日本でIT企業に勤めていたが、怪我が完治したこともあり再度プロ選手なるために独自にトレーニングを開始した。会社を退職しシンガポールでトライアウトを受けた結果、2部チームと契約することができ、2シーズンプレーした。その後、ガーナ、オーストラリア、ボリビアなどにも渡り、32歳で現役を引退した。引退後は、N氏とともにシンガポールでG社を設立（2009年）しサッカービジネスを手掛けている。
 - * 13 N氏は、大学卒業後、2年間のサラリーマン生活を経て、2002年にシンガポールリーグ（Sリーグ）のトライアウトを受けプロサッカー選手となった。2012年までの11年間、計6チームに所属し、Sリーグにおける日本人最長在籍期間及び最多出場試合を記録。その間、リーグカップやSリーグ優勝を経験。プロサッカー選手としての活動の傍ら、2005年に少年少女のサッカースクールG社を設立。2009年から事業を本格化させ、幼稚園児から高校生までのサッカースクールのほか、フットサル教室・イベントなどを展開。その他、幼稚園での運動遊びの指導、障がい者向けサッカー教室、日本人選手のSリーグトライアウトアレンジなどを手掛けてきた。現在、正社員4名、パートタイムコーチ20名のスタッフを雇用し、日本からスポーツビジネスを志すインターンシッ

ブ生も受入れている。

- * 14 T氏は、新潟市生まれの27歳である。小学校5年生まで新潟で過ごし、アルビレックス新潟のスクールでサッカーを始めた。埼玉県に引っ越した後は、県選抜に選ばれるなど活躍し、中学校進学の際は、浦和レッズのジュニアユースチームへと進んだ。しかし、ユースへは昇格できず、都内の強豪校へと進学。高校では、1年次からAチームには所属するものの、卒業まで「1.5軍のサブ選手」だった。大学（都内私立）進学を機にサッカーから離れ、アルバイトで費用を貯めては東南アジア（タイ・ラオスなど）に1か月ほどの旅に出るようになった。この時から、「海外で働きたい」と思うようになったという。大学卒業後、都内の食品関係の商社に就職し、社内トップの営業成績を残すほどであった。しかし、「海外で働きたい」という気持ちを捨てきれず3年半で退職し、大学時代のように、タイ、ラオス、カンボジアを回る3か月ほどの旅に出ることとした。そして、高校時代のサッカー仲間がプロサッカー選手となったカンボジアを訪れた際に、S氏と知り合いGS社へ入社することとなった。
- * 15 孤児院訪問は、O選手が日本人が集まるカフェで孤児院の関係者と知り合ったのがきっかけで行うようになった。ボランティアで年に数回訪問している。
- * 16 カンボジアサッカー協会との協力関係や孤児院訪問のコンタクト、日本人補習校への補助教員派遣など、GS社の事業の多くは、O選手やT氏のプライベートな活動や関係性が発端となっている。

文献

- 海老原修, 1993, 「トップアスリートの光と影」『体育科教育』41(1): 28-31.
- 千葉直樹・海老原修, 1999, 「トップ・アスリートにおける操作的越境からのシークレット・メッセージ」『スポーツ社会学研究』7: 44-54.
- 後藤貴浩, 2013, 「シンガポールにおける日本人サッカー選手」『熊本大学教育学部紀要』62: 213-224.
- 後藤貴浩, 2018, 「シンガポールで『プロサッカー選手』となった若者たち——「労働としてのサッカー」と「生き方としてのサッカー」——」大沼義彦・甲斐健人編著『サッカー開発と移動の社会学——場の開発、人の移動——』晃洋書房。(2018年年度刊行予定)
- 稲田十一, 2013, 「カンボジアにおける近代化と社会関係資本の変容」『社会関係資本研究論集』4: 133-165
- 石原豊一, 2010, 「プロスポーツのグローバル化におけるスポーツ労働移民の変容」『スポーツ社会学研究』18(1): 59-70
- , 2013, 『ベースボール労働移民—メジャーリーグから「野球不毛の地」まで』河出書房新社.
- 菊幸一, 2012, 「スポーツ選手のセカンドキャリア問題」『筑波大学セカンドキャリアプロジェクト「Top Athlete Career Support」』(2017年3月3日取得, <http://www.shp.taiiku.otsuka.tsukuba.ac.jp/tacs/?p=358>).
- 小林勉, 2014, 「国際開発とスポーツ援助—スポーツ援助の動向と課題—」『スポーツ社会学研究』22(1): 61-78.
- Maguire, Joseph, 1996, "Blade Runners: Canadian Migrants, Ice Hockey and the Global Sports Process", *Journal of Sport and Social Issues*, 20: 335-360.
- , 1999, *Global Sport*, Polity Press.
- 松尾哲矢, 2012, 「スポーツ選手のライフコース」井上俊・菊幸一編著『よくわかるスポーツ文化論』ミネルヴァ書房: 104-105.
- 文部科学省, 2008, 『トップレベル競技者のセカンドキャリア支援に関する調査研究事業報告書』.
- 文部科学省, 2010, 『スポーツ立国戦略』(2017年5月18日取得, http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/rikkoku/1297182.htm).
- Pierre, Bourdieu, 1980, *QUESTIONS DE SOCIOLOGIE*, Editions de Minuit. (= 1991, 田原音和監訳『社会学の社会学』藤原書店.)
- ピン チャンキア, 2013, 「カンボジアにおける教育制度の歴史の変遷の考察：パリ和平協定以前の教育制度に見る社会的特性」『教育学論集』9: 177-197
- Robert, D. Putnam, 1993, *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton University Press. (= 2001, 河田潤一訳『哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造』NTT出版.)

- 高橋義雄, 2004, 「日本人Jリーグ選手の国際移籍の要因に関する研究」『スポーツ産業学研究』14(1): 13-22.
- , 2012, 「日本人スポーツ選手の海外移動とキャリア形成に関する一考察」『生涯学習・キャリア教育研究』8: 71-78.
- , 2013, 「日本人エリートサッカー選手の国際移籍とアスリート教育～アジアのクラブへの移籍がセカンドキャリアに与える影響～」『トップアスリートのセカンドキャリア開発支援システムの構築に関する研究』(2016年10月14日取得, http://www.shp.taiiku.otsuka.tsukuba.ac.jp/tacs/?page_id=477).
- 鳥越皓之, 1996, 『環境とライフスタイル』有斐閣.

付記

本研究は、2016年-2018年科学研究費補助金基盤研究(B)「東南アジアにおけるサッカー移民とグローバリゼーション」(課題番号:16H03228、代表者:甲斐健人)の助成を受けて行われた。